

株 主 各 位

第76期定時株主総会招集ご通知に際しての
インターネット開示情報

連 結 注 記 表
個 別 注 記 表

(2020年4月1日から2021年3月31日まで)

株式会社 サンリツ

「連結注記表」及び「個別注記表」につきましては、法令及び当社定款第16条の規定に基づき、当社ホームページに掲載することにより株主の皆様提供しております。

連結注記表

(連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項に関する注記等)

1. 連結の範囲に関する事項

すべての子会社を連結の範囲に含めております。

連結子会社の数 3社

連結子会社の名称 千葉三立梱包運輸(株)、山立国際貨運代理(上海)有限公司
SANRITSU LOGISTICS AMERICA Inc.

2. 持分法の適用に関する事項

子会社はすべて連結しており、持分法を適用すべき関連会社はありません。

3. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

その他有価証券

A. 時価のあるもの

期末日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は総平均法により算定)

B. 時価のないもの

総平均法による原価法

② デリバティブ

時価法

③ 原材料及び貯蔵品

通常の販売目的で保有するためのたな卸資産は、当社は、先入先出法による原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)、連結子会社は主として最終仕入原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)によっております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産(リース資産を除く)

主として定率法を採用しております。

ただし、当社の本社ビル及び一関倉庫の建物には定額法を採用しております。また、1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)並びに2016年4月1日以降取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 2年～50年

機械装置及び運搬具 8年～15年

また、2007年3月31日以前に取得したものについては、償却可能限度額まで償却が終了した翌年から5年間で均等償却する方法によっております。

② 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法を採用しております。

また、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法を採用しております。

③ リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとして算定する定額法によっております。

所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

②賞与引当金

当社及び国内連結子会社は、従業員の賞与の支給に備えるため、支給見込額の当連結会計年度負担額を計上しております。

③災害損失引当金

被災した資産の復旧費用等の支払に充てるため、当連結会計年度末における見積額を計上しております。

(4)退職給付に係る会計処理の方法

当社及び国内連結子会社は、従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における退職給付債務の見込額に基づき、当連結会計年度末において発生していると認められる額を計上しております。

①退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

②数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の日翌連結会計年度から費用処理することとしております。

③小規模企業等における簡便法の採用

国内連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

4. その他連結計算書類の作成のための重要な事項

(1)連結子会社の事業年度等に関する事項

千葉三立梱包運輸(株)、山立国際貨運代理（上海）有限公司、SANRITSU LOGISTICS AMERICA Inc.の決算日は12月31日であります。連結計算書類の作成にあたっては、同日現在の計算書類を使用し、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

(2)外貨建資産、負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

なお、在外子会社の資産及び負債は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算して、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めております。

(3)重要なヘッジ会計の方法

①ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理を採用しております。

②ヘッジ手段とヘッジ対象

当連結会計年度にヘッジ会計を適用したヘッジ手段とヘッジ対象は以下のとおりであります。

ヘッジ手段 金利スワップ

ヘッジ対象 借入金の利息

③ヘッジ方針

借入金の金利変動リスクを回避する目的で、金利スワップ取引を行っております。

④ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ対象の相場変動又はキャッシュ・フロー変動の累計とヘッジ手段の相場変動又はキャッシュ・フロー変動の累計を比較し、その変動額の比率によって有効性を評価しております。

(4)消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

表示方法の変更に関する注記

（「会計上の見積りの開示に関する会計基準」の適用）

「会計上の見積りの開示に関する会計基準」（企業会計基準第31号 2020年3月31日）を当連結会計年度に係る連結計算書類に重要な会計上の見積りに関する注記を記載しております。

会計上の見積りに関する注記

（重要な会計上の見積り）

会計上の見積りは、連結計算書類作成時に入手可能な情報に基づいて合理的な金額を算出しております。当年度の連結計算書類に計上した金額が会計上の見積りによるもののうち、翌年度の連結計算書類に重要な影響を及ぼすリスクがある項目は以下の通りです。

固定資産の減損の認識の要否

(1) 当年度の連結計算書類に計上した金額

一部の事業所においては継続的に営業損益がマイナスとなっていることから当連結会計年度において減損の兆候があると判断し、減損損失の認識の要否について検討を行いました。検討の結果、当該事業所について、割引前将来キャッシュ・フローが固定資産の帳簿価額418,839千円を超えると判断されたため、減損損失は計上しておりません。

(2) 会計上の見積りの内容について連結計算書類利用者の理解に資するその他の情報

当社グループは、原則として、事業用資産について事業所を基準としてグルーピングを行っております。減損の兆候があると認められる場合には、資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フローの総額と帳簿価額を比較し、帳簿価額が割引前将来キャッシュ・フロー総額を下回る場合には、当該資産グループの帳簿価額を回収可能価額まで減額し当該減少額を減損損失として計上しております。

当該判定に用いられる将来キャッシュ・フローの見積りは、翌期以降の事業計画を基礎としており、特に一部の景気動向の影響を受け易い顧客からの受注予測に基づく取扱数量の見積りや売上原価の見積りについて、不確実性が認められる仮定が使用されており、これらに係る経営者による判断が将来キャッシュ・フローの見積りに重要な影響を及ぼす可能性があります。

(連結貸借対照表に関する注記)

1. 担保に供している資産及びこれに対応する債務

建物	5,460,471千円
土地	2,246,293千円
合計	7,706,765千円
担保に係る債務の金額	
短期借入金	2,616,600千円
長期借入金	2,918,374千円
合計	5,534,974千円

2. 有形固定資産の減価償却累計額

13,973,708千円

3. 財務制限条項

当社が締結しているシンジケートローン契約（2017年3月28日締結）には、以下の財務制限条項が付されております。

- ①各事業年度末日における連結貸借対照表に記載される純資産の部の合計金額を、2016年3月期末日における連結貸借対照表に記載される純資産の部の合計金額の75%に相当する金額、又は直近の事業年度末における連結貸借対照表に記載される純資産の合計金額の75%に相当する金額のうち、いずれか高いほうの金額以上に維持すること。
- ②各事業年度末日における連結損益計算書に記載される経常損益を2回連続して損失としないこと。

(連結損益計算書に関する注記)

災害保険金収入及び災害による損失

2021年2月に発生した福島県沖地震による被害に伴う損失を計上しております。なお、災害による損失には災害損失引当金繰入額24,400千円を含んでおります。

災害保険金収入の178,515千円は、2019年に発生した台風15号及び19号の被害に伴う保険金収入の受取額であります。

(連結株主資本等変動計算書に関する注記)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び総数に関する事項

(単位：株)

	当連結会計年度期首 株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数
発行済株式				
普通株式	6,006,373	—	—	6,006,373
合計	6,006,373	—	—	6,006,373
自己株式				
普通株式	424,347	42	8,900	415,489
合計	424,347	42	8,900	415,489

2. 剰余金の配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2020年8月27日 定時株主総会	普通株式	145,132千円	26円	2020年5月31日	2020年8月28日

(2) 配当の効力発生日が当連結会計年度末日後となるもの

2021年6月24日開催の定時株主総会に次のように付議する予定であります。

株式の種類	配当の原資	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
普通株式	利益剰余金	111,817千円	20円	2021年3月31日	2021年6月25日

3. 当連結会計年度末の新株予約権の目的となる株式の種類及び数

普通株式 159,200株

(金融商品に関する注記)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当グループは、資金運用については預金や安全性の高い金融商品等に限定し、また、資金調達については銀行借入や社債発行による方針であります。デリバティブは、借入金の金利変動リスクを回避するために利用し、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）に晒されております。

投資有価証券である株式は、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスク（為替や金利等の変動リスク）に晒されております。

営業債務である支払手形及び買掛金は、そのほとんどが1年以内の支払期日であります。借入金は、主に営業取引に係る資金調達であり、ファイナンス・リース取引に係るリース債務は設備投資に係る資金調達であります。営業債務や借入金、社債は資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実行できなくなるリスク）に晒されております。また、借入金の一部は、変動金利であり、金利の変動リスクに晒されております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

①信用リスクの管理

顧客の信用リスクに対しては、与信管理規程及び販売管理規程に従い、事業担当部署、営業担当部署及び経理担当部署が主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手ごとに期日及び残高を管理し、財務状況の悪化等による回収懸念の早期把握に努めることで、その軽減を図っております。

デリバティブ取引の利用にあたっては、金融機関の信用リスクを軽減するために、格付の高い金融機関とのみ取引を行っております。

当期の連結決算日現在における最大信用リスク額は、信用リスクに晒される金融資産の貸借対照表価額により表わされております。

②市場リスクの管理

市場価格の変動リスクに対しては、定期的に時価や発行体（取引先企業）の財務状況等を把握し、また、取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直すことで、その軽減を図っております。

金利の変動リスクに対しては、デリバティブ取引（金利スワップ取引）を利用してヘッジしております。

なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジ方針、ヘッジの有効性の評価方法等については、前述の「（連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項に関する注記等） 4. その他連結計算書類の作成のための重要な事項 (3) 重要なヘッジ会計の方法」をご参照ください。

③資金調達に係る流動性リスクの管理

資金調達に係る流動性リスクに対しては、各部署からの報告に基づき財務担当部署が適時に資金繰計画を作成・更新することで、その軽減を図っております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。また、「2. 金融商品の時価等に関する事項」におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(5) 信用リスクの集中

当期の連結決算日現在における営業債権のうち23.3%が特定の大口顧客に対するものであります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

2021年3月31日における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりです。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含まれておりません（（注）2をご参照ください）。
（単位：千円）

	連結貸借対照表計上額	時 価	差 額
(1) 現金及び預金	2,861,819	2,861,819	－
(2) 受取手形及び売掛金	3,171,777	3,171,777	－
(3) 投資有価証券 その他有価証券	470,308	470,308	－
資 産 計	6,503,905	6,503,905	－
(1) 支払手形及び買掛金	640,505	640,505	－
(2) 短期借入金	2,910,230	2,910,230	－
(3) リース債務（流動）	230,306	230,306	－
(4) 長期借入金	3,186,374	3,185,955	△418
(5) リース債務（固定）	952,373	989,884	37,511
負 債 計	7,919,789	7,956,882	37,093
デリバティブ取引（※） ヘッジ会計が適用されているもの	△29,796	△29,796	－
デリバティブ取引計	△29,796	△29,796	－

（※）デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については△で示しております。

（注）1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項
資産

（1）現金及び預金

預金はすべて短期であるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

（2）受取手形及び売掛金

これらはすべて短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

（3）投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項は後述の「（有価証券に関する注記）」をご参照ください。

負債

（1）支払手形及び買掛金、（2）短期借入金、（3）リース債務（流動）

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

（4）長期借入金、（5）リース債務（固定）

これらの時価については、元利金の合計額を、新規に同様の借入又は、リース取引を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。変動金利による長期借入金は金利スワップの特例処理の対象とされており、当該金利スワップと一体として処理された元利金の合計額を、同様の借入を行った場合に適用される合理的に見積られる利率で割り引いて算定する方法によっております。

デリバティブ取引

後述の「（デリバティブ取引に関する注記）」をご参照ください。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：千円)

区 分	連 結 貸 借 対 照 表 計 上 額
非 上 場 株 式	24,287

これらについては、市場価格がなく、かつ、将来キャッシュ・フローを見積るには過大なコストを要すると見込まれます。したがって、時価を把握することが極めて困難と認められるものであるため、「資産 (3) 投資有価証券 その他有価証券」には含めておりません。

3. 金銭債権の連結決算日後の償還予定額

(単位：千円)

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
現 金 及 び 預 金	2,861,819	—	—	—
受 取 手 形 及 び 売 掛 金	3,171,777	—	—	—
合 計	6,033,596	—	—	—

4. 長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

(単位：千円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
短 期 借 入 金	2,910,230	—	—	—	—	—
リ ー ス 債 務 (流 動)	230,306	—	—	—	—	—
長 期 借 入 金	—	2,107,267	1,044,105	19,992	15,010	—
リ ー ス 債 務 (固 定)	—	253,447	241,292	226,271	231,362	—
合 計	3,140,536	2,360,714	1,285,397	246,263	246,372	—

(有価証券に関する注記)

その他有価証券で時価のあるもの

(単位：千円)

区 分	取 得 原 価	連 結 決 算 日 に お け る 連 結 貸 借 対 照 表 計 上 額	差 額
連 結 貸 借 対 照 表 計 上 額 が 取 得 原 価 を 超 え る も の 株 式	164,584	417,762	253,178
小 計	164,584	417,762	253,178
連 結 貸 借 対 照 表 計 上 額 が 取 得 原 価 を 超 え な い も の 株 式	61,565	52,545	△9,019
小 計	61,565	52,545	△9,019
合 計	226,149	470,308	244,158

(注) 表中の「取得原価」は、減損処理後の帳簿価額であります。

(デリバティブ取引に関する注記)

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ

(単位：千円)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種別	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価
原則的処理方法	金利スワップ取引 支払固定・受取変動	長期借入金	1,691,250	1,076,250	△29,796
合 計			1,691,250	1,076,250	△29,796

(注) 1. 時価の算定方法 取引先金融機関から提示された価格等に基づき算定しております。

(賃貸等不動産に関する注記)

賃貸等不動産の状況及び時価に関する事項

1. 賃貸等不動産の概要

当社では、東京都その他の地域において、賃貸収益を得ることを目的として賃貸用のオフィスビル（土地を含む）及び賃貸用の倉庫を所有しております。なお、当該不動産の一部については、当社及び一部の子会社が使用しているため、賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産としております。

2. 賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額及び当連結会計年度における主な変動並びに連結決算日における時価及び当該時価の算定方法

(単位：千円)

			当連結会計年度 (2021年3月31日)
賃 貸 等 不 動 産	連結貸借対照表計上額	期 首 残 高	384,429
		期 中 増 減 額	△29,678
		期 末 残 高	354,750
	期 末 時 価		461,000
賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産	連結貸借対照表計上額	期 首 残 高	9,150,239
		期 中 増 減 額	△374,485
		期 末 残 高	8,775,753
	期 末 時 価		17,531,630

- (注) 1. 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した金額であります。
2. 当連結会計年度増減額のうち、賃貸等不動産における減価償却費は29,960千円であります。また、賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産における主な増加は不動産取得147,940千円、主な減少は減価償却費520,213千円であります。
3. 主な物件の時価の算定方法については、社外の不動産鑑定士による不動産鑑定評価書に基づく金額、その他の物件については一定の評価額や適切に市場価格を反映していると考えられる指標に基づく金額であります。ただし、第三者からの取得時や直近の評価時点から、一定の評価額や適切に市場価格を反映していると考えられる指標に重要な変動が生じていない場合には、当該評価額や指標を用いて調整した金額によっております。

3. 賃貸等不動産に関する損益

(単位：千円)

		当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
賃 貸 等 不 動 産	賃 貸 収 益	55,415
	賃 貸 費 用	59,760
	差 額	△4,345
	そ の 他 (売 却 損 益 等)	-
賃 貸 等 不 動 産 と し て 使 用 さ れ る 部 分 を 含 む 不 動 産	賃 貸 収 益	1,558,584
	賃 貸 費 用	932,850
	差 額	625,734
	そ の 他 (売 却 損 益 等)	-

(注) 賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産には、サービスの提供及び経営管理として当社及び一部の子会社が使用している部分も含むため、当該部分の賃貸収益は、計上されておりません。賃貸費用には、当該不動産に関連する費用（減価償却費、修繕費、保険料、租税公課等）を含めております。

(1 株当たり情報に関する注記)

1 株当たり純資産額 1,519円91銭

1 株当たり当期純利益 65円79銭

(重要な後発事象に関する注記)

該当事項はありません。

(注) 連結計算書類の記載金額は千円未満の端数を切り捨てて表示しております。

個別注記表

(重要な会計方針に係る事項に関する注記)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券

① 子会社株式

総平均法による原価法

② その他有価証券

時価のあるもの

期末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は総平均法により算定）

時価のないもの

総平均法による原価法

(2) デリバティブ

時価法

(3) 原材料及び貯蔵品

通常の販売目的で保有するためのたな卸資産は、先入先出法による原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）によっております。

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

主として定率法を採用しております。

ただし、本社ビル及び一関倉庫の建物については定額法を採用しております。また、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに2016年4月1日以降取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建 物 2年～50年

機械装置 8年～15年

また、2007年3月31日以前に取得したものについては、償却可能限度額まで償却が終了した翌年から5年間で均等償却する方法によっております。

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

定額法を採用しております。

また、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法を採用しております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとして算定する定額法によっております。

所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法を採用しております。

3. 重要な引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与の支給に備えるため、支給見込額の当事業年度負担額を計上しております。

(3) 災害損失引当金

被災した資産の復旧費用等の支払に充てるため、当事業年度末における見積額を計上しております。

(4) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務の見込額に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を計上しております。

数理計算上の差異は、発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により翌事業年度から費用処理しております。

4. その他計算書類の作成のための基本となる重要な事項

(1) ヘッジ会計の方法

① ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理を採用しております。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

当事業年度にヘッジ会計を適用したヘッジ手段とヘッジ対象は以下のとおりです。

ヘッジ手段 金利スワップ

ヘッジ対象 借入金の利息

③ ヘッジ方針

借入金の金利変動リスクを回避する目的で、金利スワップ取引を行っております。

④ ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ対象の相場変動又はキャッシュ・フロー変動の累計とヘッジ手段の相場変動又はキャッシュ・フロー変動の累計を比較し、その変動額の比率によって有効性を評価しております。

(2) 消費税等の処理方法

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

表示方法の変更に関する注記

(「会計上の見積りの開示に関する会計基準」の適用)

「会計上の見積りの開示に関する会計基準」(企業会計基準第31号 2020年3月31日)を当事業年度に係る計算書類に重要な会計上の見積りに関する注記を記載しております。

会計上の見積りに関する注記

(重要な会計上の見積り)

会計上の見積りは、計算書類作成時に入手可能な情報に基づいて合理的な金額を算出しております。当事業年度の計算書類に計上した金額が会計上の見積りによるもののうち、翌年度の計算書類に重要な影響を及ぼすリスクがある項目は以下の通りです。

固定資産の減損の認識の要否

(1) 当事業年度の計算書類に計上した金額

一部の事業所においては継続的に営業損益がマイナスとなっていることから当事業年度において減損の兆候があると判断し、減損損失の認識の要否について検討を行いました。検討の結果、当該事業所について、割引前将来キャッシュ・フローが固定資産の帳簿価額418,839千円を超えると判断されたため、減損損失は計上しておりません。

(2) 会計上の見積りの内容について計算書類利用者の理解に資するその他の情報

当社は、原則として、事業用資産について事業所を基準としてグルーピングを行っております。減損の兆候があると認められる場合には、資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フローの総額と帳簿価額を比較し、帳簿価額が割引前将来キャッシュ・フロー総額を下回る場合には、当該資産グループの帳簿価額を回収可能価額まで減額し当該減少額を減損損失として計上しております。

当該判定に用いられる将来キャッシュ・フローの見積りは、翌期以降の事業計画を基礎としており、特に一部の景気動向の影響を受け易い顧客からの受注予測に基づく取扱数量の見積りや売上原価の見積りについて、不確実性が認められる仮定が使用されており、これらに係る経営者による判断が将来キャッシュ・フローの見積りに重要な影響を及ぼす可能性があります。

(貸借対照表に関する注記)

1. 担保に供している資産及びこれに対応する債務

建物	5,413,651千円
土地	2,165,726千円
合計	7,579,377千円
担保に係る債務の金額	
1年内返済予定の長期借入金	2,549,936千円
長期借入金	2,778,370千円
合計	5,328,306千円

2. 有形固定資産の減価償却累計額

13,734,202千円

3. 財務制限条項

当社が締結しているシンジケートローン契約（2017年3月28日締結）には、以下の財務制限条項が付されております。

- ①各事業年度末日における連結貸借対照表に記載される純資産の部の合計金額を、2016年3月期末日における連結貸借対照表に記載される純資産の部の合計金額の75%に相当する金額、又は直近の事業年度末における連結貸借対照表に記載される純資産の合計金額の75%に相当する金額のうち、いずれか高いほうの金額以上に維持すること。
- ②各事業年度末日における連結損益計算書に記載される経常損益を2回連続して損失としないこと。

4. 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

関係会社に対する短期金銭債権	3,569千円
関係会社に対する長期金銭債権	536,943千円
関係会社に対する短期金銭債務	9,963千円

(損益計算書に関する注記)

1. 関係会社との取引高

売上高	33,174千円
仕入高	140,712千円
営業取引以外の取引高	23,412千円

2. 災害保険金収入及び災害による損失

2021年2月に発生した福島県沖地震による被害に伴う損失を計上しております。なお、災害による損失には災害損失引当金繰入額24,400千円を含んでおります。

災害保険金収入の167,241千円は、2019年に発生した台風15号及び19号の被害に伴う保険金収入の受取額であります。

(株主資本等変動計算書に関する注記)

自己株式の種類及び総数に関する事項

(単位：株)

	当 事 業 年 度 期 首 数 株 式	当 事 業 年 度 増 加 株 式 数	当 事 業 年 度 減 少 株 式 数	当 事 業 年 度 末 数 株 式
自己株式				
普通株式	424,347	42	8,900	415,489
合計	424,347	42	8,900	415,489

(税効果会計に関する注記)

繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

繰延税金資産	
賞与引当金	122,056千円
退職給付引当金	228,495千円
災害損失引当金	7,471千円
資産除去債務	105,257千円
金利スワップ	9,123千円
投資有価証券評価損	65,664千円
関係会社株式評価損	12,083千円
減損損失	460,239千円
その他	62,856千円
繰延税金資産小計	1,073,247千円
評価性引当額	△491,653千円
繰延税金資産合計	581,594千円
繰延税金負債	
その他有価証券評価差額金	△52,844千円
繰延税金負債合計	△52,844千円
繰延税金資産の純額	528,749千円

(関連当事者との取引に関する注記)

種類	会社等の名称	議決権等の所有 (被所有)割合(%)	関連当事者との 関係	取引内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
子会社	SANRITSU LOGISTICS AMERICA Inc.	所有 直接100%	梱包事業の受託 役員の兼任	資金の貸付 (注)	536,943	長期貸付金	536,943

取引条件及び取引条件の決定方針等

(注) 資金の貸付については、市場金利を勘案して利率を決定しています。

(1株当たり情報に関する注記)

1株当たり純資産額	1,508円10銭
1株当たり当期純利益	95円83銭

(重要な後発事象に関する注記)

該当事項はありません。

(注) 計算書類の記載金額は千円未満の端数を切り捨てて表示しております。